プラーヌンクスツェレ特集号に寄せて

今回の「地域社会研究」11号は、プラーヌンクスツェレに関する特集号にした。プラーヌンクスツェレとは、ドイツで考案され、多くの事例に適用されている市民参加の方法であるが、本センターの主任研究員である篠藤明徳教授（別府大学文学部人間関係学科教授）は、ドイツ在住時代より考案者であるペーター・C・ディーネル教授（ヴパタール大学）に師事し、プラーヌンクスツェレに関する日本代表となっている。在独時代からプラーヌンクスツェレの日本における紹介に力を注いできた。

昨年、篠原一東京大学名誉教授が「市民の政治学」（岩波新書）で、討議民主主義の具体的方法として紹介したことをきっかけに、プラーヌンクスツェレは日本でも高い関心を呼んでいる。また、それにヒントを得て開発された「市民討議会」が、東京青年会議所千代田区委員会主催で実施され、行政、マスコミ、大学関係者や市民団体などからも高い評価を受けている。

そこで今回の「地域社会研究」11号では、プラーヌンクスツェレの紹介と最近の動きを特集した。その内容は、以下５つの記事・論文からなる。

１、ドイツの新しい市民参加「プラーヌンクスツェレ」
２、政治に常にコミットする“市民の役割”

３、「日本プラーヌンクスツェレ研究会」の設立とその活動
４、歓迎の挨拶 ―「日本プラーヌンクスツェレ研究会」の設立にあたり
５、プラーヌンクスツェレから見た「市民討議会」の意義

まず、「ドイツの新しい市民参加『プラーヌンクスツェレ』」では、この新しい市民参加の方法について事例を取り上げながら、紹介している。昨年『日経グローカル』に掲載された論文をもとに、今年いろいろな場所で行われた講演の内容を加味して執筆されたもので、プラーヌンクスツェレの概略を理解するのに適している。

２番目の論文では、ディーネル教授がベルリン会議で講演した内容が紹介されている。プラーヌンクスツェレの役割と今後の展望について同教授が述べたものである。

次に、「『日本プラーヌンクスツェレ研究会』の設立とその活動」では、今年３月12日に設立された「日本プラーヌンクスツェレ研究会」設立の経緯や趣旨が報告されている。同研究会には、東京青年会議所のメンバーに加え、在独時代から篠藤教授と親交を持ち、日本でプラーヌンクスツェレについて著述してきた人々や最近バイエルン州で大規模に実施されたプラーヌンクスツェレに直接関心を持った若い研究者などが集っている。プラーヌンクスツェレの考案者であるディーネル教授は、同研究会設立に当たって歓迎の挨拶を特別寄稿された。

最後の「プラーヌンクスツェレから見た『市民討議会』の意義」では、前述した「市民討議会」の内容を概述し、プラーヌンクスツェレとの比較からその意義を検証している。こんなにも早く実施できたことを篠藤教授も驚いている。

別府大学地域社会研究センターは、発足以来、地域社会の新しいあり方を探るべく、様々な研究・活動を行ってきたが、市民・住民と行政・政治の関わり方を問うこともセンター活動の柱の一つであった。グローバル化時代の今日、ドイツ、日本と場所を異にしても、直面している問題の多くは共通している。「地域社会のあり方」を問うことは、決して「地域的、特殊な事柄」を考えることに止まらず、実は「人と社会のかかわり」を根本的に問い直す普遍的意味も持っている。本号をきっかけに、ドイツで生まれたプラーヌンクスツェレの理解を深めると同時に、市民と政治のあり方、人と社会のかかわりについて、より深く考えるきっかけになれば幸いである。

別府大学地域社会研究センター
所長　秋　田　　清